

京都市基本計画点検委員会
意見・提案集

平成 2 7 年 3 月

京都市基本計画点検委員会

- 親の立場で考えると、京都の子どもたちに、自分たちの生まれ育ったところがいかに素晴らしいかを学ばせ、大学や就職で一度は京都を離れたとしてもやはり京都に戻ってくるというようになってほしい。
- 若者が活躍する多様な場を創出していくべき。(グローバル／地域密着など) 学生の志向に応じた情報提供を行っていきけるよう、産学連携のパイプを太くしていく必要がある。
- 学生の定着を当面の目標として取り組むのではなく、「大学のまち・京都」として総合的な施策を進めることにより、結果として市内就業や定住が増えるのでは。
- 学生の定住促進をやっていくのなら、まずは市職員が市内居住をすべき。
- 京都に住んだらこれだけいいんだよというイメージビデオを作って流すだけでもイメージは変わってくる。メディア戦略、イメージ戦略を打っていくべき。
- 自分が学生の頃はトレンドドラマやアニメを見て東京に憧れた。今の時代はネットによる情報収集が主流。ネット上におもしろいものがあると広がるので、子どもたちを対象に京都の大学に行きたいと思わせる短い動画を制作してネット上に公開してはどうか。
- 愛着さえあれば学生は定着する。愛着は、学生時代に地域と関わりを持ち、学生が京都の魅力を感じるによって生まれる。そのために、地域との交流を促せるならばシェアハウスを作るのもひとつの方策。
それに対し、地域内での孤立の原因となるワンルームマンションをもう少し規制すべき。
- 文科省は各大学に均等に補助金は出さず、頑張った大学に出すようになっている。地域と連携する大学に対する補助金もある。その補助金では行政と協定を結ぶ、年に何回か話し合う機会を設けるなどの項目があるのでそれをうまく活用しては。大学に働きかけてもっと学生に地域貢献に取り組ませるべき。ただし義務のような形ではなく、地域の温かさに触れる機会を増やす。地域に入った学生が京都ファンになってくれることが、就職・定住していくことにもつながる。
- 積極的な地域貢献について、市から大学に要望を出したらいい。例えば大学生が防災訓練や消防団、区民運動会への参加などで地域を盛り上げる。高齢者は世話を焼きたがる。学生にとってはそれがノルマだとしんどいので、楽しめたりあるいは単位化させたりすると進んでできる。文科省も必修科目だとプラスになる。
- 学校運営協議会の取組が地域の学び、コミュニティの構築に貢献している。地域の人が地域の伝統行事を学び直す、マンション住民の子どもを通してコミュニティができるなど、まさに学びのまちのめざす姿である。これを更に広げていくことが重要。
- 自分の周りにも、無気力だったり自分探しをしている若者が多い気がする。自身の将来像を描けないのではないかな。
- ひきこもりになった青少年の親・家族への情報提供が重要。
- 不登校の兆しに親が気付かない場合も結構あるので、保護者向けの啓発セミナーなど情報提供してはどうか。また、不登校になる子どもたちの特徴が分かれば、未然に防ぐこともできるので、そうした場で特徴を捉えるためのアドバイスをしていけばよい。
- 親を巻き込んで青少年の育成を図るべき。ニートの子がいても、漠然とした不安は抱えているものの、金銭的には困っていないし体力もあるために、本気で解決しようとしない。例えば、その後の顔末をテーマにした映画を制作し、親にも考える機会を提供しては。

- ゆとり世代がだめだというが、語学力や発想力、柔軟性など意外なところで評価できるかもしれない。例えば、留学生や学生の力を借りてまちの多言語化を進めてはどうか。まち全体で取り組む何かが必要なときだと思う。
- 地域で青少年を守り育てていかなければならない。
- 青少年が地域との関わりを持つことが、多様な機会の提供につながる。
- 京都のまちといった単位ではなく、互いのことをもっと知っている町内の単位に戻って、青少年の健全な育成について考えるべきでは。
- 大学生だけでなく、次世代の担い手である中学・高校生が、このまちをいかに守っていつてくれるかということを考え、中高生が頭を使う場、心を動かす場、感動する機会をもっと作ることも「学びのまち・京都」の視点として必要ではないか。
- 小学校までは地域に関わっていても中学から関わりがなくなることが多いので、中学校の部活に月1くらいのペースで地域活動への参加を呼び掛けてはどうか。帰宅部の人には、無理強いはいしない。
- 高校生に関しては、授業に地域のNPOへのインターン体験を盛り込んではどうか。
- ひきこもりを受け入れる学校の数が少なすぎる。
- 不登校の児童・生徒は、学校の授業に出席しなくても、地域活動への参加などを出席扱いにできればよいのだが。
- 保護司がきっちりとプロセスを踏んで、課題を抱えた青少年の支援に関わるようにすれば、随分変わるのではないか。
- ニートの問題は京都だけでやるのは難しい。社会の中に自分の役割があることが大事。
- 不登校やニートの問題に対応するには、ネットワークが重要で、そこから新たな情報を入手することが可能となる。自分が方向転換しようとしても、そのための情報につながらないとうまくいかない。問題解決の第1歩につながる情報をうまく伝えるためのネットワークをNPO法人等と連携しながら一緒に作ってはどうか。
- 人と接するのが苦手であれば、メールやインターネットを活用し情報を配信することもできる。一方で、実際に顔を合わすことができる場も必要。
- ニートの人にも、社会に出て労力を提供し、その対価をもらえるという訓練が必要。働くことによって達成感があるとよい。海外では、古紙やペットボトルを学校に持って行き、それがたまるとお金に換えていく仕組みもあり、金銭感覚を磨くことにつながっている。働かないと対価が得られないことを学ぶ必要がある。その対価は現金ではなく、昼御飯や地下鉄のチケットでもよい。
- 今の子どもたちは、言われたことには従うが感動が足りない。やってみたい、おいしい、きれい、あるいは腹が立つなど感情のほとばしるようなことがない。本来は親がすることであり、具体的に言われると難しいが、まずは感動する機会を提供することが大事。
- ルールづくりからやっていたのでは間に合わないので、自分のところではまず始めている。ひきこもりの高校生も受け入れており、いきいきして職業体験や地域社会貢献の体験をしている。学校側は戸惑うかもしれないが、お母さんは大変喜んでおられる。そういったケースでも、支援体制を無償ではなく、雇用としてきっちり行うことが前提。

-
- 不登校の子どもが増えているが、学校に行かないのと友だちがいらないのとは別。友だちがほしければ休みの日に遊んだりする。友だちがいれば社会とつながる。友だちづくりは大切。学校に行きたいと思わせる場面を作る。親も無理に学校に行かせないようにしている。学校へ行かせる前段階として、学校が全てではない形も必要。
 - 社会状況から鑑みて、スクールカウンセラーの有資格者の絶対数が少ないのではないかと。人材育成を進めていくことも大事。
 - 生活相談や学習支援を必要としている学生がいるため、一部の小学校では学習支援のスタッフの配備がされているが、これをもっと普及させる必要がある。
 - 国際的リーダーの養成については、西京高校など、高校レベルでの取組も進んでいると思う。更に広げられるかがポイントだろう。
 - 文化や伝統産業の分野でも、千家十職の樂吉左衛門氏がイタリアへ留学したり、武者小路千家の若宗匠（千宗屋氏）がニューヨークで活動したりと、若いころに海外を経験している。帰国後はリーダーとして活躍し、日本の文化を海外に発信しており、そうした文化の担い手育成という観点から留学を考えるべきではないか。
 - 最近は社会人を経験した意欲のある学生が増えてきており、そうした世代の学生をターゲットにしてはどうか。留学への意欲は、10年程前と比べて2極化が進んでいる。以前より多くの学生が内向き志向になっている一方で、残りの少数の学生は非常に意欲的。ただし、そうした先鋭的な留学希望者は東京に集中しており、京都でも出てきてほしい。
 - どんどん世界に出て行って活躍する人材を輩出するだけでなく、これからのワーク・ライフ・バランスを考えた生き方の中では、京都にベースを置きながら世界で活躍するとか、いろいろなタイプがあってよいのではないか。
-